

地誌 武蔵野台地

ちしきの
むさしの
だいら

首 都圏は武蔵野台地に広がっているが、東は荒川低地を越えて大宮台地、下総台地に続き、また南は多摩川低地を経て多摩丘陵へとつながる。これらの台地の形成は二百万年くらい前に遡るといわれている。

武蔵野台地は関東地方のほぼ中央を占めているが、地盤の隆起が続く秩父山地と、逆に沈降を続ける平野との挟間に置かれている。

隆起してできた秩父山地は、川の侵食によって削られ、谷や尾根を発達させたが、一方、その東側の低い地盤は、地殻変動によって沈降し、さらに流れる川によって土砂が堆積し、関東平野が形成された。このような隆起と沈降の歴史はいまも続いているという。

離して谷をつくった。武蔵野台地と大宮台地の間にはこうして荒川低地ができた。

このころ富士山や箱根火山の火山活動によって火山灰が降り積もり、武蔵野礫層の上にローム層を形成した。このローム層が堆積した時代は旧石器時代に当たっている。武蔵野台地の各所で石器が出土していることから、人類が活動する舞台となったことは確かであろう。

しかし一度引いた海は、そのあと再び拡大し始め、約五、六千年前には、大きな海進が関東平野一帯に及んだ。この海は「奥東京湾」と呼ばれ、川越付近まで海が入り込んだ。東京西北部(埼玉県南部)を流れる柳瀬川、黒目川などの谷も入江となり、内湾に住むカキなどの貝を食用とした縄文時代前期の人々の暮らしは、彼等が遺した貝塚や縦穴住居の発見から裏付けられている。

河川の谷は、上流から運び出された泥や砂が入江の底にたまり、現在の荒川低地(沖積低地)を形成していった。

その後ふたたび海は沖に退きはじめ、弥生時代に入ると、沖積低地は陸化して、荒川などの河川は氾濫を繰り返した。

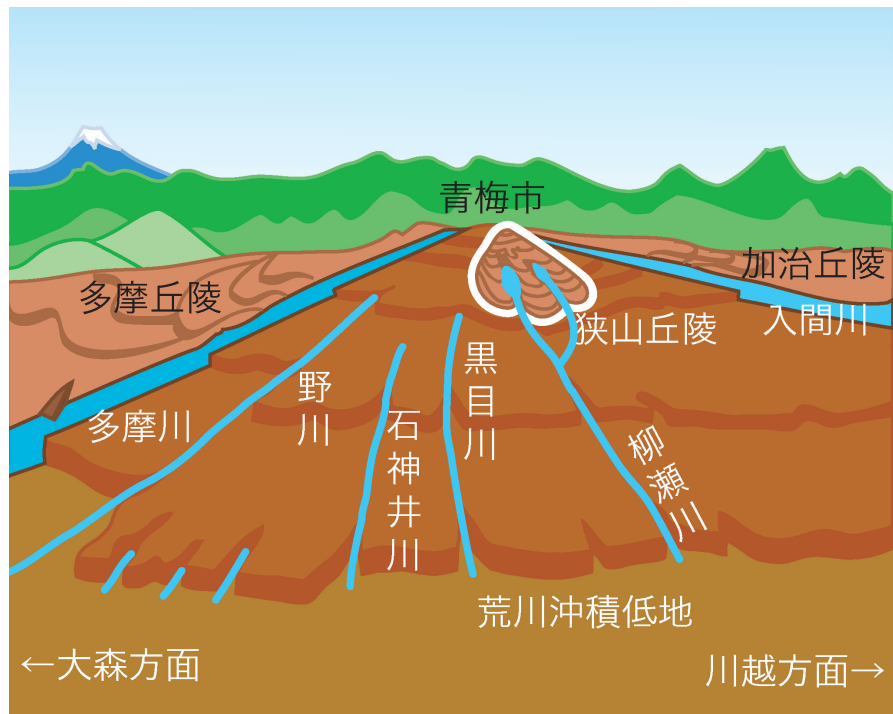
東 京都青梅市の地点から、狭山丘陵を越えて扇形に広がった武蔵野台地は、落差約百メートル、緩やかに下りつつ低地に移る。秩父山地から流れ出していた古多摩川によって運ばれた多量の砂礫によって扇状地を形成し、現在の武蔵野台地となったのである。

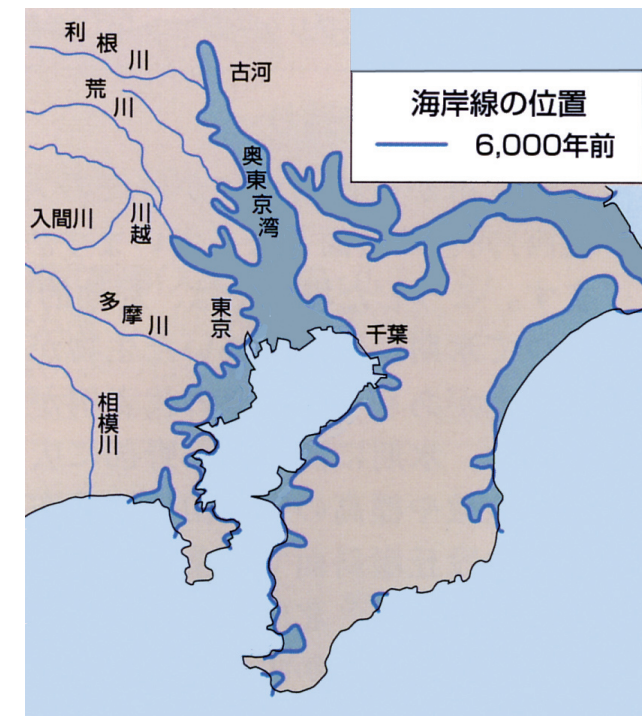
狭山丘陵は、七、八十万年前ころ堆積した礫層と粘土層から成り立っている。狭山丘陵の北には加治丘陵が横たわり、また南に多摩丘陵がつながって、武蔵野台地を取り囲む。

これらの台地の形成について見落とせないのは、地球上で起こった大きな気温の変化である。氷河期がたびたび訪れ、そのため海面は後退し、また寒冷度が緩和されると前進して、海退、海進を繰り返した。しかし全体としては海退が続き、河川が土砂を運んで台地が形成されたのである。

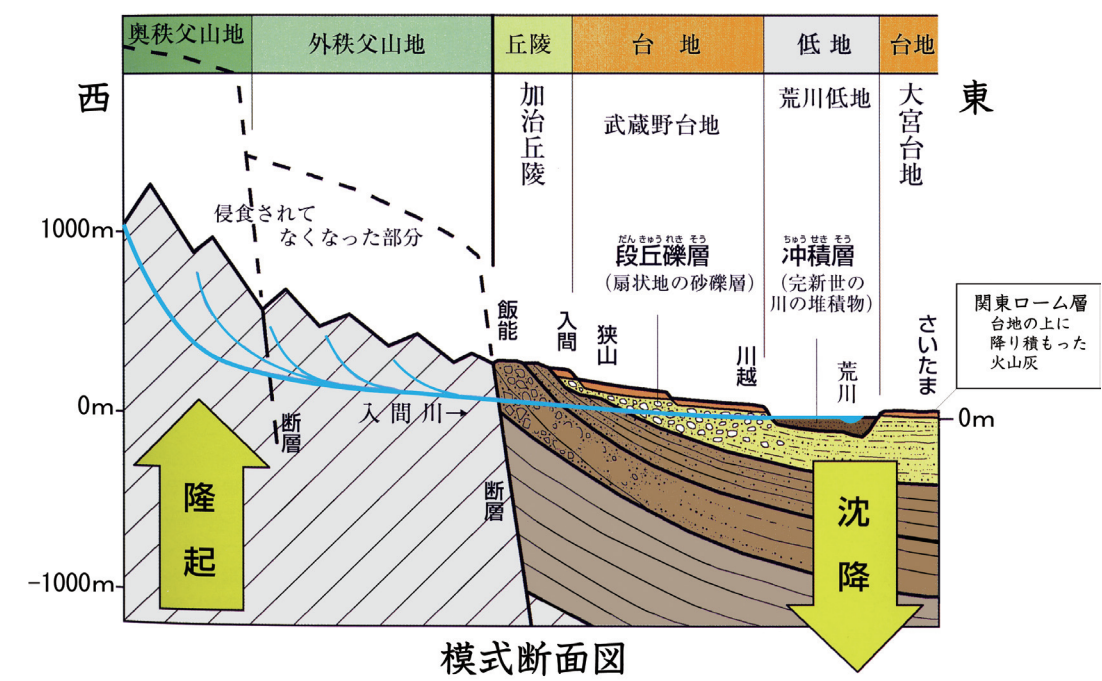
台地の地層を調べると、河川が運び出した礫の層が堆積しており、十万年前ころまでの武蔵野は一面浅い海であったことが裏付けられている。

しかし海は次第に退き、約二万年前ころになるといまの東京湾が干上がって陸地となった。そのため河川は延長され、浸食力が増して、それまで一続きであった平野を切り





六千年くらい前、縄文海進のころ



模式断面図



狭山丘陵付近に発する柳瀬川が新河岸川に合流する志木市役所付近かつては湧水も豊富で、古代人が好んだ快適な居住地だった。



新河岸川に沿った台地の縁辺にある国指定史跡、富士見市の水子貝塚公園



竪穴住居内(発掘物から推定してつくられたもの)



なかでも重要な史跡となった富士見市の「水子貝塚」では、古代の住居跡も発掘され、出土品は精密に調査されたのち、富士見市立水子貝塚資料館に収納されている。付近一帯は水子貝塚公園として整備され、公開されている(入場無料、無休)。

明 治十年(1877)、横浜港に着いた動物学者エドワード・モースは、新橋に向かう汽車が大森駅を出てすぐ、線路脇の切り通しに、白い貝殻が露出していていることに気づき、「貝塚」と見抜いた。大森貝塚の発見はよく知られ、あまりにも有名だが、約六千年以前、「海進」によって東京湾は深く入り込んでいた。

J R京浜線で大森から北上すると、上野、日暮里あたりの西側は崖線に沿っていて、上野公園、谷中の墓地は本郷台地に続いており、鉄道が開通したころには、崖から湧水が流れていた。このあたり一帯は武蔵野台地の縁辺である。

荒川の支流である新河岸川に沿って北上し、川越市の仙波付近まで浅瀬の海辺が続いていた。このことは、上中里付近で発掘された大量の「かき」とこれを調理する工場跡地をはじめ、埼玉県に入ってから、和光、朝霞、志木、富士見市に至る武蔵野台地の縁辺に、いくつもの貝塚が散在していることから裏付けられる。